

「聖書信仰」——その「近代主義」を超えて

藤本 満

はじめに

本稿は、2014 年の福音主義神学会全国研究会議での発題に始まり、その後、発題を膨らませて書籍とした『聖書信仰——その歴史と可能性』（いのちのことば社、2015 年）の一部をベースに記した。

「聖書信仰」という表現は、一つの「信仰のあり方」のように受け取られるが、神学的にはプリンストン神学（さかのぼれば 18 世紀プロテスタント正統主義）の逐語靈感説・言語靈感説にたどり着く。それは当時の歴史的課題を色濃く反映した神学項目である。本稿は、その成立過程と核となる考え方を示し、その背後にある近代主義を明らかにすることを試みている。上述の「聖書信仰」は緻密に論じられた神学項目であるが、他方、その素朴な表現の中には、「十字架のことばは……救いを受ける私たちには神の力です」というような救いの力が込められている。この救済論的方向は、20 世紀前半のファンダメンタリズムの時代にあっては、米国プリンストン神学とは毛色の違う英国福音主義を支え、戦前日本の福音派にあっても異なった潮流として存在してきた。そして今また、さらに新しい可能性を聖書信仰に与えようとしている。

I. 「聖書信仰」——逐語（言語）靈感説の成立過程

A. 17 世紀プロテスタント正統主義

福音主義神学の中心に聖書があることは、16 世紀宗教改革のテーマの一つである「聖書のみ」（sola scriptura）に明白である。「聖書のみ」とルターが言う

き、まずそれはローマ教皇と教会会議を最高権威とするカトリック教会に対抗してのことであった。教会は豊かな伝統にはぐくまれつつも、なお過ちを犯しうる存在であり、教会は聖書と聖霊の前にへりくだって初めて、教会たり得る。こうして、聖書を第一の原理とする聖書主義が確立された。

さらにカルヴァンが、聖書が神の言葉そのものであるとの根拠を理論的証拠によらない「聖霊の内的確証」として説いたとき、様々な論議を飛び越えて、聖書はア・プリオリに（自明に）神の言葉と考えるような道筋が備えられた。聖書「信仰」のルーツを直接的に探すのであれば、このような、聖書が神の言葉であるとは「自明のこと」（聖霊の照明による信仰的確証）という信仰者の確信にたどり着く¹。

17世紀でプロテスタント教派神学が確立されていく過程で、聖書の靈感説はこれまでとは違った次元で論じられていった。それが、プロテスタント正統主義が展開した「逐語靈感説」である。聖霊は、それぞれの著者の個性を配慮しつつも、書くべき内容を一言一句伝え、著者は一字一字それを書き留める。ルター派のヨハン・クウェンシュテット（Quenstedt, 1671-1688）によれば、仮に聖書の著者が靈感によって記述しているのなら、「聖霊が語り、記者が記されたもののなかには、錯誤も誤りも、誤りの危険さえもない」²。さらに彼は、そもそもヘブル語本文には母音が記されていないところ、中世のユダヤ人学者が母音を記したとき、そこにも神の靈感が働いたと主張した³。

改革派神学を代表するフランソワ・トゥレティーニ（Turretini, 1623-1687）もまた、聖書の無誤性を説き、仮に「どんな小さな部分に誤りがあったとしたら、

聖書全体が怪しげなものになる」⁴と論じた。さらに聖書本文は奇跡的に保存継承されてきたという。つまり写字生による誤りを許したら、ご自身の言葉を間違えなく伝えようとする神の摂理を否定することになる⁵。こうして無誤性は範囲を拡大して論じられた。

ジュネーブのゴサン（Louis Gaussen, 1790-1863）は「十全靈感」という表現を用いた。「十全」（plenary）とは、聖書全体が全的に靈感を受けていると考える。つまり、靈感は救いや信仰のことだけでなく歴史や科学の領域に及んでいる。ゴサンはまた「言葉そのもの」（verbal）の靈感を強調した。靈感は聖書の記者による「言葉の選択」にまで及ぶ⁶。聖霊が聖書の記者にどの用語・表現を使うかを導き、そうして書き留められた聖書が無誤の状態では保全される。こうして「plenary, verbal, inerrant」に靈感された（十全に、言語〔逐語〕が、無誤の）聖書という聖書観ができあがった。

B. プリンストン神学

プロテスタント正統主義に端を発する聖書の無誤論は、ヨーロッパではなくアメリカのプリンストン神学で開花していく（トゥレティーニによる三巻の組織神学書は、長らくプリンストン神学校の組織神学の教科書であった）。プリンストン神学は、カルヴァン派神学の大系であるが、後のファンダメンタリズムと福音主義全般に影響を与えたのは、特にその理性主義的神学的手法とア・プリオリな聖書信仰である。

第一にチャールズ・ホッジの理性主義的神学を考えてみよう。神の啓示は「言葉」を客観的媒体として「知性」に伝達され、たましい全体に作用する。「真理」は感情の中には与えられず、知性によって発見され解明される。真理は、御言

¹ William Abraham, *Canon and Criterion in Christian Theology* (Oxford University Press, 1998), 133.

² Johann Andreas Questedt, *Theologia Didactico-Polemica*. I.79; Geoffrey Bromiley, *Historical Theology: An Introduction* (Wipf & Stock Pub., 1998), 312 からの引用。

³ 当時、パーゼルの改革派、ブルクストルフ一族（全員、名はヨーハン）によるラビ文書研究が掘り下げられ、その集大成として『ヘブライ語聖書 Biblia Hebraica』が出版されたことも、これらのことに大きく関係している（J・ペリカン『聖書は誰のものか？——聖書とその解釈の歴史』、訳 佐柳文男〔教文館、2006年〕263頁）。

⁴ Francis Turretini, *Institutes of Elenctic Theology*, trans. George Musgrave Giger, ed. James T. Denison, Jr. 1679; (reprint, Presbyterian and Reformed, 1992), I: 16.

⁵ Turretini, I: 107.

⁶ ゴサンの場合、聖霊と記者との間は口述筆記的になる。後に、こうした考え方は機械的な靈感であると批判され、記者自身の独特な人格的特性や表現の選択を許す有機的・動的な靈感説が考えられるが、靈感が「言葉の選択にまで」及ぶという点で verbal は貫かれる。

葉の中に客観的に提示される (objectively presented in the word)⁷。」そのような啓示の真理は、科学の世界同様に検証され、理性によって確実に認識できるという。こうして聖書の預言や歴史的データをさかんに検証し、ホッジは聖書の真理性を証明し、その上に神学を構築しようとする試みを積み上げていった。

第二に聖書のア・プリオリな無誤性が大きなトピックとなる。それをウォーフィールドは以下のように説明している。Ⅱテモテ3章16節「聖書はすべて神の靈感による」と訳されるギリシャ語「セオプニユース」は、「聖書が〈神によって吹き込まれ〉ているとか、聖書がその人間的な著作者の中への神的な〈吹き込み〉(in-breathing)の所産であるということではなく、聖書は神によって吹き出された……神の創造的息の所産」⁸であるという。ウォーフィールドは、一方では聖書の真理性を科学的(帰納的)に検証しはするが、他方で、そして最終的には、聖書の真理性を証明不要な信仰に演繹的に依拠させる。聖書が神の息を受けた文書(神の息によって吹き出された文書)であるなら、それが故に、その主張のすべては徹底的に信頼に値し、すべての宣言には権威があり、その最後の一つに至るまで、まさに神の言葉、神の託宣(oracles)である⁹。

プリンストン神学を担った者たちは、この時代のリベラルな批評学の台頭に抵抗して、トゥレティーニなどの逐語靈感説よりも綿密に無誤論を考え出していく。はじめチャールズ・ホッジは、聖書をギリシャ神殿にたとえて、もしも「そこかしこに砂の小石が見つかったとしても、正気な人であればだれ一人として、この建造物が大理石でできていることを否定する者はいない¹⁰」と、鷹揚に構えていた。ところが息子 A・A・ホッジの時代になると、写本上の食い違いや誤りを受け入れざるを得なくなった。すると彼は写本ではなく、検証すること

ができない「原典において誤りがない」と主張しはじめる¹¹。またウォーフィールドは、矛盾を矛盾として認めようとはせず、あくまでそれらは将来的に「真実な聖書の研究」によって解決されることを信じることを主張する。言うならば、ア・プリオリな真理はア・プリオリなままで信ずるべきであると。

ウォーフィールド型の「聖書信仰」は、長く、日本の福音派に根づいてきた。戦前の岡田稔は、1921年に神戸神学校に入学し、校長のサムエル・フルトンからウォーフィールドを学ぶように勧められ、1930年にはウォーフィールドの『基督教の本質』を、翌年には『基督なき基督教』を翻訳し、1934年から約一年、フィラデルフィアのウェストミンスター神学校でメイチェンの講義を受けた。1932年には同派の松尾武、1935年には常葉隆興もウェストミンスター神学校に留学した。こうして岡田らはプリンストン神学から来る「聖書信仰」を神学的内実をもって日本に紹介し浸透させていった。

岡田は当時を振り返って、高倉徳太郎の『福音的基督教』が広く行きわたっていたので、「福音主義」という用語よりも、「聖書信仰」のほうが、聖書に対する自分たちの立場を明確することができたと述懐している¹²。

戦後1959年に、岡田は、榊原と共にウォーフィールドの『聖書の靈感と権威』(カルビニスト協会)を、さらに1963年にはJ・I・パッカーの『福音的キリスト教と聖書』(いのちのことば社)を翻訳した。パッカーの書物は福音派の聖書信仰に神学的な屋台骨を提供してきたと言っても過言ではない¹³。英国のアングリカンとしては珍しく、パッカーが最も多く引用している人物はウォーフィールドである。彼は、大学生の頃からピューリタニズムに関心を燃やし、プリンストン神学を学んでいた。パッカーはウォーフィールドと同様に、聖書を「神によって吹き出された」書、つまり聖書を記すこと自体が神の行為であったと

⁷ Charles Hodge, "Intellect," 672, 棚村重行『二つの福音は波濤を越えて』(教文館、2009年)201頁からの引用。またホッジの理性に対する信頼、また科学としての神学など、詳しくはジェームズ・パー『ファンダメンタリズム——その聖書解釈と教理』、訳 喜田川信・柳生望他(ヨルダン社、1982年)315-322頁

⁸ ウォーフィールド『聖書の靈感と権威』(日本カルビニスト教会、1959年)114頁

⁹ 同書、143頁

¹⁰ Charles Hodge, *Systematic Theology*, 1:170.

¹¹ A. A. Hodge, *Outlines of Theology*, rewritten and enlarged ed. (The Banner of Truth Trust, 1879), 75. Stanley Grenz, *Renewing the Center: Evangelical Theology in a Post-Theological Era* (Baker Academic, 2000), 76.

¹² 『岡田稔著作集』(いのちのことば社、1993年)、5巻・神学論文、322頁

¹³ もっとも、戦後の改革派教会は、改革派神学や聖書観をプリンストン神学からくみ上げるのではなく、オランダ改革派の神学者カイパーやバーピンクやベルカウワーにリソースを求めていく。

解釈する (99 頁)。「この意味で、靈感とは人間的記者たちの上に働いた神の聖霊の超自然的摂理的な感化であって、その結果、記者たちは、神が啓示の真理を他に伝えるために書かせたいと欲せられたとおりに書くことができたのである」(100 頁)。聖書は「聖書は一語一語神から授かった」(54 頁)。

パッカーは、啓示が言葉であることの重要性を語る。「神は御言葉を伝えるために聖書本文を靈感されたのであるから……書かれた言葉が事実それを伝えるものであることが保証される必要がある」と主張する (119 頁)。さらにパッカーは「命題的啓示」という小見出しを立て (122 頁)、言葉の真理性・客観性を強調する。彼の論調はウォーフィールドそのものであるが、ここで対抗意識を抱いているのは新正統主義に対してである。新正統主義にあっては、啓示は言葉ではなく出来事である。啓示が出来事であるなら、聖書は「啓示ではなく、啓示の記憶簿」となり、最終的には、出来事の証言は人間的記録になると論じる。記録でも物語でも、パッカーにとってそうした範疇は、「なんらかの意味で聖書の表明が事実をさしていることを削り取るのに用いている」(222 頁) ことになり、結局は聖書のすべてが命題的啓示であると言い切れなくなってしまう、という。

II. 聖書言葉をそれほどまでに客観的命題とみなすのか？

福音主義者がみな、このウォーフィールドやパッカーのように命題的啓示としての言語に絶対的な信頼を傾けてきたわけではない。以下、時代が前後するが、聖書信仰の内部において、言語靈感に対する不安を表現している人物を挙げてみる。1940 年代にウォーフィールド型の聖書信仰に立ちながら、新福音主義を率いたカール・ヘンリーと同じ世代に、バナード・ラムがいる。彼は、聖書の言葉をそこまで客観的命題と理解することには反対であった。「命題的啓示を強調する昨今の福音主義の強調が、実のところヘーゲルの純粹概念言語の一つの表れにすぎないとは驚くべきことである¹⁴。」神が無限であるとしたら、有限である人間がその言語をもって無限なる神をとらえることはできない。む

¹⁴ Ramm, *After Fundamentalism* (Harper and Row, 1983), 90.

ろん、その無限なる神が人の次元に降りてこられ、人の言語をもってご自身を啓示するのが聖書であるが、それは神ご自身のほんの一部にすぎない¹⁵。理性を駆使して聖書を真理の体系としてまとめていくことには、「神の啓示を、神秘を欠いた原稿として読むようなもの」¹⁶ に等しい。

ラムの有名な『聖書解釈学』(聖書図書刊行会、1963 年)を訳した村瀬俊夫も同じ視点から以下のように述べる。「十全に靈感された言語とは、どういう言語なのか。考えられるのは『絶対的な意味をもつ、不可謬である言語』という概念である。しかし、そんな概念の言語を歴史的次元における文化的現象の中に求めるのは、[すべて歴史的なものは相対的であることを免れないのであるから] 不可能である¹⁷。」

さらに英国福音主義の F・F・ブルース¹⁸を見てみよう。彼は 1974 年の「ローザンヌ誓約」において、聖書が「神の靈感による、真実で、権威ある唯一の書き記された神のことばであり……それが確証 (affirm) するすべてにおいて誤りがなく」との宣言文にコメントして、実際の啓示としての聖書の実体はもう少し

¹⁵ Ramm, *Special Revelation and the Word of God* (Eerdmans, 1961), 21.

¹⁶ Ibid., 23-24.

¹⁷ 村瀬俊夫「聖書信仰の意味と反省——『靈感された言語』の絶対性」、『聖書信仰』68 号 (1966 年 8 月)、引用は「聖書論争をめぐる視点からの個人的所見」『福音主義神学』(2010 年) 107-108 頁

¹⁸ ブルースは英国マンチェスター大学の聖書学の教授である。彼は、インターバーシティの学的水準を高めることに貢献した。IVF は、1877 年に設立された Cambridge Inter-Collegiate Christian Union というケンブリッジ大学を中心とした学生伝道の組織の端を発する。時代は、ケズィックによって英国全体が霊的に刺激され、また世界宣教・学生伝道が盛んであった。1889 年には、オックスフォードの学生伝道組織とも合流して、SCM (Student Christian Movement) が結成されるものの、後に SCM がリベラルな方向付けを許容していく中、より保守的なグループが 1928 年に IVF を結成して、SCM から独立した。

IVF は 1938 年に聖書研究委員会を設置し、1945 年に聖書学研究のセンターとしてケンブリッジにティンダル・ハウスとティンダル聖書研究会を開設して、旧約にはリバプール大学の W・J・マーティン、新約にはマンチェスター大学の F・F・ブルースを招き入れて、英国福音主義の聖書学を高めていった。1956 年に IVF から出版された旧新約の『ティンダル注解書』(いのちのことば社から翻訳出版、2003 年~2014 年)は、こうした学的向上によってイギリスの福音派の説教が支えられたという (Bebbington, *Evangelicalism in Modern Britain*, 261)。

し複雑であることを論じている。聖書の啓示は歴史の流れの中で与えられ、多くの場合、当時の状況における啓示の意味を明らかにするため、ふんだんに歴史的記述が折り込まれている。出エジプトであれバビロン捕囚からの解放であれ、その他の回顧録も預言記述にも同様に、「歴史的記録そのものが神の啓示の一部として存在している」。しかも「こうした物語のいくつかは、特に出エジプトは、神の民の生において繰り返し実現し、最終的にキリストの救いの働きで完成される贖いの働きを明らかにするために記されている¹⁹。」

さらに、そうした聖書の歴史的記述の中には民の反応（信仰か不信仰か、服従か不服従か）も記されている。そこでは必ずしも神が人に語りかけるのではなく、人が神に、あるいは人が人に語りかける。

こうしてブルースは、「神の言葉である聖書」と言うとき、客観的に一方的に神の側から伝えられた御旨という啓示理解よりも、その働きが起こっている歴史の出来事そのもの、さらにそれを受け止めている人間の状況が不可分的に入れ込まれていて、啓示が出来事の中に、一そして人間の応答の中にも現出している事実を強調している。

ここでブルースは聖霊の働きを強調している。ローザンヌ誓約の解説を記したジョン・ストットが、聖書の記者に働いた聖霊は、今日の読者の心を照らすことによって、あらゆる時代あらゆる文化の中にある読者の心の目が開かれることを強調していると説明している。だが、ブルースは一歩進んで、照明 (illumination) という言葉は、御言葉の記者と読者の双方にいのちの御霊が働いていることの霊的な現実を表現していると言う。書き手と読み手とは、区別されなければならない。しかし、神の言葉が語られ聞かれる時、そこにおける聖霊の働きは、両者が相互に依存関係 (interdependence) にあることを強調すべきである、と。これほどの聖霊による今日の干渉がなければ、ユダヤの背景にあった福音が、見事にその殻を破って異邦の土壌に根付いたのと同じように、現代の世界中の異文化にも福音を根づくことはないと言う。

前段落を「ここで」と始めたことを再度強調しておきたい。聖書の言葉がそ

¹⁹ *The Harvester* 55 (Nov. 1976: 320-323), 320. 全文は PDF で、http://www.biblicalstudies.org.uk/pdf/ffb/lausanne-2_bruce.pdf

の時代の人間の言葉によって記されているという言葉の「文化性」「歴史性」に目を背けず、積極的に受け止めようとするとき、それは単に批評学の必要性の重要性が強調されるだけでなく、かえって、過去と現在、神の啓示と人間の言葉の間に存在する「ギャップ」の橋渡しを可能にする「聖霊の働き」（聖書が記されたのと同様な啓示的働き）を強調する結果になっている。

Ⅲ. 理性の時代の聖書信仰

さて、話をプリンストン神学に戻して、ここ数十年その聖書観の背後にある哲学的前提・思想的潮流が批判されてきていることを二点指摘しておきたい。

第一は、18～19 世紀の認識論に特有な「基礎づけ主義」(foundationalism)である。啓蒙主義の理性主義的認識論は、中世以来の哲学論争・神学的伝統を精査していく過程で、人間の真理観・価値観が誤った土台の上に構築されている限り、そこにどんなに真理の柱を組み込んでも、必ず建物はゆがみ、ついには崩れると考えた。この問題を解決するとしたら、まず疑い得ない絶対的な土台を見だし、その上に真理の建物を構築する以外にない²⁰。そうしてデカルトは、「我思う故に我あり」という、疑い得ない「我」という存在にたどり着く²¹。このような土台は、文化脈とは無関係に普遍的で、理性を働かせることができる人間であるなら、少なくとも理論的には可能な土台であると考えた。これが哲学でいう「基礎づけ主義」である。

近代を振り返ると、リベラル神学も保守神学も同じようにこうした「基礎づけ」的認識論の上に成り立っていたことがわかる。リベラル神学は、当初、教会が作り上げた神学という建物を一旦脇にどけて、近代聖書学を土台としたキ

²⁰ W. Jay Wood, *Epistemology: Becoming Intellectual Virtuous* (InterVarsity Press, 1998), 78-79.

²¹ ウィリアム・エイブラハムは、*Canon and Criterion in Christian Theology*, 174-180 で、デカルト（フランス・カトリックの対宗教改革の時代の新しい神学を追究していた人物）の方法論が、プロテスタントの聖書主義の認識論に「酷似」していることを指摘している。

リスト教真理を再構築しようとする。その過程で、聖書をさらに分解して、デカルト的土台、すなわちキリスト教を超えた宗教の普遍真理にたどり着こうとした。また保守主義は、デカルト的土台を無誤であると信じる聖書に求めた。

第二は、プリンストン神学に直接的な影響を与えていたトーマス・リードらによるスコットランド常識哲学である。これは同じ啓蒙主義でも、ヒュームらの懐疑論に対抗して出てきた。リードによれば、思考の根源的諸原則は認識論において自明なことであると人の心が捉えるようにできている。人間にはコンセンサスが備えられていて、文法、数学、論理学の公理、形而上学の因果律、また意識や記憶の信頼性、自由意志、善悪の判断能力等を、人間全般に共通する普遍的真理の前提とすることができる。

常識哲学は、プリンストン創設時から用いられ、プリンストン神学に応用された²²。神学は科学であって、「偏見のないまともな良識人であれば、同じことを同じように認識でき、認識しなければならない」、「しかも基本的真理はあらゆる時代や場所においてすべての人にとって同じように認識される」という前提に立っていた²³。

良識人の理性に対する全き信頼は、ホッジの神学においては、言葉に対する信頼となる。聖書の言葉を知ることは、すなわちその言葉が言及している霊的現実を直接に知ることである。今日の聖書の読み手は、「神ご自身の言葉、思い、意図そのものと出合ったと確信することができる」と考えた²⁴。言語に対する

²² 詳しくは Mark Noll, *Princeton and the Republic, 1768-1822*, 28-58; McGrath, *Passion for Truth* (InterVarsity Press, 1996), 166-173; 丸山忠孝「プリンストン神学におけるスコットランド常識哲学の影響——チャールズ・ホッジの人間論をめぐって」、『途上——キリスト教と思想』14号（1992年）71-92頁。

²³ Marsden, *Fundamentalism and American Culture* (Oxford University Press, 1980), 111-112. 「自然科学が事実と自然の法則に関心を寄せるとしたら、神学は聖書の事実と原則に関心を寄せる」(Charles Hodge, *Systematic Theology*, I, 18.)。マーズデンは、*Understanding Fundamentalism and Evangelicalism* (Eerdmans, 1999) の中で、「啓蒙主義科学に恋をした福音主義」と興味深い章を設けている。

²⁴ Trembath, *Evangelical Theories of Biblical Inspiration* (Oxford University Press, 1987), 19; Rogers and McKim, *The Authority and Interpretation of the Bible* (Oxford University Press, 1987), 291. このような言語理解に対する批判として、Kevin J. Vanhoozer, "The Semantics of Biblical Literature," in D. A. Carson and J. D. Woodbridge, eds.,

信頼とは、言い換えれば、言葉が客観的事実と一致している（科学におけるように証明・検証できる）という考え方である。理性が捉えた言葉は外側の客観的事実と一致していて、それを理性によって検証し、把握することができるから、真理である。こうして「聖書が神の言葉であることは、聖霊が信仰者の心の中に与える証しによる」という神秘的・心的・主観的側面は影を潜め、聖書の無誤性が客観的事実であることを論証するという理性的側面の強調へと聖書信仰が方向を転じたことになった²⁵。

総じて、理性に対する全き信頼、あるいは一定の理論枠で聖書・靈感を定義してしまう傾向は、プリンストン神学を源流に持つ米国福音主義神学に常に影を落とした²⁶。イギリスの福音主義の神学者マクグラスは手厳しくこのことを批判する。「福音主義は、プリンストン神学の背後にある複雑な前提に気づかず、その前提から生まれる結論を安心して受け入れていた。その結論がどこから来ているかを問うこともせずに²⁷」。

IV. ウォーフィールド型とは、異なった流れ

A 英国

アメリカでトラクトシリーズ『ファンダメンタルズ』が出版されたとき、その第一号でウォーフィールド（キリストの神性を担当）と肩を並べて執筆したスコットランド長老派の神学者ジェームズ・オア（担当は「処女降誕」）は、批評学の動向に警戒心を抱きつつも、次のように記している。

「微細なデータに至るまで聖書には『誤りがない』と実証しなければ、啓

Hermeneutics, Authority and Canon (Zondervan, 1986), 67-75.

²⁵ ジェームズ・バー『ファンダメンタリズム』、訳 喜田川信（ヨルダン社、1982年）306頁。宇田進も同様に論じる。本来の改革派の神学は、聖書の無謬性を信仰者が聖霊の内的証しによって悟るものと考えてきた。ところが、スコットランド常識哲学の影響により、聖霊の内的証明は「あらゆる外的な証拠をとおして」人々のうちに確信を与える、という証拠の積み上げによる確信へと変化した（「福音派聖書論の文献と動向」『福音主義神学』10号、1979年、168頁）。

²⁶ プリンストン神学の背景にある啓蒙主義的態度については、Marsden, *Understanding Fundamentalism and Evangelicalism*, 122-134を参照。

²⁷ Alister McGrath, *Passion for Truth: The Intellectual Coherence of Evangelicalism*, 170.